

・ 対人恐怖についての一考察

——TAT に表わされた自己と他者を通して——

木 村 法 子

On Anthropophobia

—An Analysis of Self and Others in TAT—

KIMURA Noriko

問 題

対人関係は人間の存在に密接にかかわるものであり、人は、現実的なものであれ想像的なものであれ、他者の存在と切っても切り離せない関係にある。そして、そこから、心の病もまた数多く生じてくる。なかでも対人恐怖症は、対人関係のあり方そのものが症状の中核をなす神経症であり、その病理の背後には、自己と他者をめぐる普遍的な問題が存在するといっても過言ではない。

対人恐怖の特徴の第一は、これが日本に特有の神経症であるとされ、よってわが国を中心として研究の対象とされてきたことである。その中で日本的な対人関係の特性が指摘されてきたが、いわゆる「日本的」ということばが自明のものとして用いられ、その根底にあるものに触れえないまま安易な文化論に流れてしまうことが多かったように見受けられる。一方では「特殊日本的」といわれているものは「前近代性」にすぎないとして、文化ではなく社会構造に帰因させる見解もあるが、これもやはり本質的な症状理解からはほど遠いように思われる。文化的な問題を掘り下げるには、現象を生じさせる構造そのものに目を向けることが必要であり、より大局的な見方が求められよう。土居(1971)の「甘え」、木村(1972)の「間」、河合(1975)の「場の倫理と個の倫理」などの考え方は、そのような試みとして評価されるが、これらは、対人関係と不可分な自我の問題を解明する必要性を示唆していると思われる。

第二に、対人恐怖は青年期に多く発症する神経症である。笠原ら(1972)は、対人恐怖を分類するにあたって「正常者の青年期という発達段階において一時的にみられるもの」という段階を設けているが、青年期には発症に至らずとも潜在的に対人恐怖的心性を有する者も多いと考えられている。両者の類似性は、特に自己像に関して指摘されている。それは要約すれば「二重の自己意識」とか「仮面的適応」とかいったことばで表現されるものである。青年期においては、自我同一性の確立の途上で現実と理想とのギャップに揺れ動きながら、自分が自分であると感じる自分と他人の目に映った自分の違いにとらわれ(Erikson, 1959)、諸々の自己像のずれの中で微妙なバランスが保たれていると考えられる。一方、対人恐怖症者においては、自己主張欲求と他者への過剰な配慮という形での矛盾する二面性がつとに指摘されており、内沼(1977)はこれらをまとめて高い理想や自尊心と現実への失墜恐怖との対立葛藤としてとらえている。このような両者の類似性は現象的に記述されたものであるが、その根底にあるのは自我のあり方をめぐる問題で

あり、自我確立のプロセス上における不安定性ということが構造的な類似性としてあると考えられる。

このような観点を導入することにより、これまで個々ばらばらに論じられたり現象的記述にとどまっていた対人恐怖の文化的、発達の、病理的な諸側面を、包括的に説明することができると考えられる。そして、それらの最も集約されたものは正常な青年期における対人恐怖的心性であり、これを解明することによって、また逆に各々の側面が浮き彫りにされるように思われる。彼らにとっての自己と他者とはどんなものであるのか、TATによってそれを探り、対人恐怖について多少なりともまとまった考察を試みようとするのが本稿の目的である。

方法

〈被験者〉 大学生121名(男子60名, 女子61名)。年齢は18~22才であった。

〈テスト〉 ①対人不安質問紙—小川(1974)の対人不安質問票より対人恐怖に特徴的な項目を一定の手続きによって選択し(これをAp項目¹⁾とする), これに緩衝項目とL尺度を加えて作成した7段階評定の質問紙。②TAT—Murray版の1, 2, 3 BM, 4, 6 BM, 13 MF, blank card (白紙)の計7枚。

〈手続き〉 講義時間を利用し集団で施行された。

結果

(1) 対人不安質問紙について

28個のAp項目について「非常にあてはまらない」～「非常にあてはまる」のそれぞれに0～6点を与え、その合計をAp得点とした。したがって理論的にとりうるrangeは0～168である。分布はほぼ正規で、平均は83.0, 標準偏差は24.5, 性差はみとめられなかった。この結果により、得点の上位から対人不安の高い群(以下H群と略)35名(男子16名, 女子19名), 下位から同じく低い群(以下L群と略)35名(男子22名, 女子13名)を選択し、これをTATの分析の対象とした。

(2) TATについて

TATの物語は、対人関係の表現を軸にカードごとにいくつかのテーマに分類された。評定は、20%の物語について筆者と他の一名で独立に行ったところ、87.8%の一致をみたので、信頼性があるものとして残りは筆者のみで行った。

〈1〉 このカードでは少年が何らかの理由で悩んでいるという物語(I)が多かった。その理由

表1 カード1のテーマ

		L 群			H 群		
		男	女	計	男	女	計
I. 少年が悩んでいる	a. 他者の関与により	7	2	9	6	7	13
	b. 内的理由により	11	7	18	3	5	8
II. 少年が夢や空想の世界にいる		2	3	5	5	4	9
III. その他		2	1	3	2	2	4

については、a—他者の関与によるもの (ex. バイオリンの練習をしなさいとお母さんに叱られたけど、やりたくないのでながめている)と、b—少年の内的不全感によるもの (ex. いくら練習してもうまくいかないの、どうしたらよいかと考えている) とに大別された。前者では母親や教師などからバイオリンを強制されている例が多くみられた。その他のテーマとしては、少年がバイオリンに直接かかわりなく夢をみていたり空想している物語(Ⅱ)が目についた(表1)。L群ではI-bが、H群ではI-aとⅡが多いという対照的な傾向がみられた (Iの下位分類については $\chi^2=3.884, p<.05$)。

〈2〉 このカードは構成が難しいため、説明的で物語としてのふくらみに欠ける反応が目立った。まず、ほとんどの被験者が主人公とみなしている手前の女性と、背景の人物や環境との関係が述べられているもの(I)と、そうでないもの(Ⅱ)に分類した。前者については、その関係が、a—親和的なもの (ex. 家族が仲よく働いており娘は見送られて学校へ出かける)と、b—異和感を生じているもの (ex. 村の雰囲気になじめず外へ出ていく) とに分類した。後者については、a—一応説明しているもの (ex. 女教師が畑の中の道を歩いている)と、b—無視または無生物化しているもの (ex. 美術館の絵の前に立っている)とに分類した(表2)。Iについては、L群でaが、H群でbが多くみられた ($\chi^2=5.461, p<.05$)。なお、bについては個人的なもの和社会的なもの (ex. 奴隷の悲惨を見て解放運動を志す)があり、L群では両者が半々であるがH群ではほとんどが個人的なものであった。

表2 カード2のテーマ

		L 群			H 群		
		男	女	計	男	女	計
I. 主人公と背景のかかわりがある	a. 親和的	7	5	12	3	3	6
	b. 異和感	3	2	5	4	9	13
Ⅱ. 主人公と背景のかかわりがない	a. 一応の説明	5	4	9	2	3	5
	b. 無視, 無生物化	2	2	4	4	3	7
Ⅲ. その他		5	0	5	3	1	4

〈3BM〉 このカードでは、主人公が悲しんでいたり疲れているといった暗い物語が多かった。その理由として、他者が関与しているもの(I)と、主人公の内的要因による不全感(Ⅱ)とに大別された。Iについては、a—重要な他者の喪失 (ex. 夫, 子供, 恋人等の死や不治の病)と、b—不和や別離 (ex. 失恋, 離婚, けんか)とに、Ⅱについては、a—身体的なもの(病気, 疲労), b—精神的なもの(I以外の理由, 受験に失敗など)に分類した(表3)。Iについては、L群でbが、H群でaが多い傾向がみとめられた ($\chi^2=3.800, p<.10$)。さらに結末を検討すると、H群では不定が8名、自罰的なものが2名あり、全体に消極的否定的な傾向が目立った。L群では肯定的、楽天的なものが多く (ex. 離婚しても友だちとしてつき合う。別れ話が出たので手切れ金をもらうことにする), また第三者の介入によって解決するものもいくつかみられた (ex. 失恋して泣いていると前から彼女のことを思っていた別の男性が現われる。夫婦げんかを親が仲裁する)。これはH群にはみられない特徴であった。

表3 カード3BMのテーマ

		L 群			H 群		
		男	女	計	男	女	計
I. 他者の関与すること とで悩んでいる	a. 重要な他者の死	4	3	7	6	7	13
	b. 別離・不和	11	1	12	2	4	6
II. 内的不全感	a. 身体的	3	3	6	4	3	7
	b. 精神的	2	4	6	4	3	7
III. その他		2	2	4	0	2	2

〈4〉 このカードでは、男性が何らかの理由で出ていこうとするのを女性が止めているというパターンが多かった。その理由が、男性と女性の直接的なかかわりによらないもの(I)と、2人との間のいざごぎによるもの(II)とに分類した。Iはさらに、a—外的要因によるもの(ex. 仕事、戦争、危険なこと)と、b—第三者の関与するもの(ex. 男あるいは女への攻撃に対する怒り、反撃、報復)とに分類した(表4)。統計的に有意な差はみとめられなかったが、L群では前者が、H群では後者がより多くなっていた。このカードでは他のカードより「その他」が多くなったが、その中でL群においては「ノイローゼの男を女がなぐさめる」とか「幸福なカップルの話」などpositiveなものが多いのが特徴であり、H群においては「劇を演じている俳優同士」「CIA 部員と女スパイ」など作られた関係とでもいふべきものが多いのが特徴であった。

表4 カードの4テーマ

		L 群			H 群		
		男	女	計	男	女	計
I. 女と直接的な かかわりなく 男が出ていく	a. 外的要因	9	4	13	4	5	9
	b. 第三者の関与	4	3	7	5	7	12
II. 女とのいざごぎで男が出ていく		6	3	9	4	4	8
III. その他		3	3	6	3	3	6

〈6BM〉 このカードでは、母—息子あるいはそれに準ずる関係(祖母—孫、おば—おい等)が大半を占めた。2人の中に積極的なコミュニケーションが表現されているもの(I)について、a—息子が母親に何かを打ち明けたり話したりしている、b—母親が息子に干渉したり拒否したりしている、の2つに分類された。aについてはさらに、①息子が仕事や結婚で自立していく、②家を出ていた息子が帰ってくる、の2つに下位分類された。そして、2人が共に何かを悲しんだり考えこんだりしているものをIIとした(表5)。L群ではIが圧倒的に多かったが、H群ではIIがかなりみられ($\chi^2=3.999, p<.05$)、その内容はほとんどが父の死であった。息子が出ていく理由としては、L群では仕事と結婚が半々であったが、H群では結婚としたものはわずか1名、それもL群がすべて男子であったのに対してH群の1名は女子であった²⁾。

表5 カード 6BM のテーマ

			L 群			H 群		
			男	女	計	男	女	計
I. 2人の積極的 コミュニケーションがある	a. 息子→母	出ていく	9	2	11	5	4	9
		帰ってくる	4	2	6	1	3	4
	b. 母→息子(干渉等)			4	3	7	3	3
II. 2人が共に 悲しんでいる	a. 肉親の死		2	2	4	5	5	10
	b. 没落・倒産		0	1	1	2	1	3
III. その他			3	3	6	0	3	3

〈13MF〉 このカードでは、まず、ベッドの上の女性が死んでいる場合(I)と生きている場合(II)とに分類された。前者は攻撃的なテーマ、後者は性的なテーマが中心となった。Iについては、a—攻撃性の表現が直接的なもの(ex. 男が女を殺す。男に関連することで女が自殺する)、b—攻撃性の表現が間接的なもの(ex. 女が殺されているのを男が発見する。女が病気で死ぬ)、c—死因不明、の3つに分類した。IIは、sexに関連した内容、別れ話、浮気などが主なものであった(表6)。Iについては、L群ではbが、H群ではaが多くみられた($\chi^2=4.027$, $p<.05$)。すなわち、L群では女性が死んでいるのを発見する物語が多く、女性の死は男性と直接関係ないが、H群では逆に男性と女性の関係で結果的に女性が死ぬという物語が多くみられた。

表6 カード 13MF のテーマ

		L 群			H 群		
		男	女	計	男	女	計
I. 女が死んでいる (攻撃的なテーマ)	a. 直接的攻撃性	3	4	7	5	7	12
	b. 間接的攻撃性	9	6	15	3	4	7
	c. 死因不明	1	0	1	1	2	3
II. 女が生きている(性的なテーマ)		7	2	9	4	3	7
III. その他		2	1	3	3	3	6

〈blank card〉 どちらの群においても、登場人物が明確で何らかの形で自己像が投影されて表現されていると考えられる物語(I)が半数を占めた。残りのうち半分は、自分が主人公になったりエッセイ風に直接自己表現しているもの(II)、あとの半分は、人が登場しないもの、アノニムの主人公のもの、白や無をテーマとしたものなど自己表現の希薄なもの(III)であった。Iについては、登場人物1人の物語がH群では18名中12名、L群では14名中5名と、H群に多い傾向がみられた($\chi^2=3.030$, $p<.10$)。またH群女子において同年齢の異性を主人公にした物語が3名みられたが、L群では異性を主人公にした物語では「少年」「老婆」など年齢的にも遠い設定がなされていた。登場人物が複数の物語では恋人または夫婦の設定が多く、したがってL群では幸福な物語が多くなっている。IIについては、特にL群男子において「今、答案用紙に向かってい

る」とか「きのうバイトの帰りに……」など、きわめて現実描写に近い反応が5名みられたのが特徴的であった。一方、H群男子では「今までの問題はこれでよかったのだろうか」とか「この人は卒論のためにこれをしているのだろうか」など、テスト場面への不安や実験者への間接的な攻撃を示したものが2名あった。女子では、どちらも詩的表現が多くみられた。Ⅲに関しては、H群では「無の世界」、L群では「白い世界」「四次元の世界」ととらえられることが多かった。L群男子では全体に短い話が多く、L群女子ではⅠ、Ⅱ、Ⅲを通じてメルヘン的な物語が目立ったが、これはH群女子にはほとんどみられない特徴であった。

考 察

(1) 対人不安質問紙について

Ap得点の分布が正規に近く、平均が理論的な中央値にほぼ一致したということにより、一般に正常青年においても対人恐怖の心性が潜在的に存在するという本稿の前提は、一応みとされたと考えてよいと思われる。従来、対人恐怖は男性に多いといわれてきたが、この結果では性差はみられなかった。したがって発症率の差は、対人不安を感じることを意味づけが男子にとっても女子にとってもでは異なっていることを示唆している。この点に関しては、以下の考察において詳しく論じたい。

(2) TAT について

TAT では、各テーマの出現する割合そのものにはあまり差がみられなかったが、その中での対人関係の持ち方、表われ方に、興味深い差がいくつか認められた。登場人物の数によってそれぞれ意味が異なるので、順を追って考察したい。

まず、人物が1人だけ描かれているカードでは、画面にない人物の導入がひとつのポイントとなった。カード1では、少年が悩んでいる理由について、H群では他者の関与、それも意に添わない圧力によるものが多かった。ここでは、バイオリンをやりたくないという自己主張の欲求と、それに対する悪い評価への恐れとの葛藤が表現されているものと思われる。Bellak (1954) によれば、「家族に対する関係」と「達成欲求」がこのカードで最もよくみられるテーマであるが、H群では前者、L群では後者が主になっているとみなされる。後者からは、ある程度の自信とある意味での対人的関心の薄さが推測される。しかし空想のテーマはH群に多く、H群では他者を気にするかさもなければ周囲を無視して内閉するというパターンがとられるようである。

次に3BMであるが、ここでは他者の導入に関しては差がみられなかったが、関係のあり方は両群で異なっていた。H群では死という絶対的な対象喪失が語られ、代替不能な他者の重要性が推測される。この点、H群では個有の名と絶対性を持つ他者との一対一の関係が重視されているようで、「個」としての自我の確立が進んでいるように思われる。ただし、それは背後に依存対象を失う不安が予期されるゆえに、のびきならないものでありながら脆弱さを持っていることは否めないであろう。このような観点からみると、L群においては「この人でなければならぬ」という他者の絶対性が希薄である。別離のテーマは修復可能性を残しており、決定的な結末を生じない。いわば「個人と個人」の関係が展開されるよりは「関係」そのものの方が先にあると考えられる。たとえば「失恋して泣いていると新しい彼が登場する」という話では、前の恋人と自分との関係の個別性は薄れて新しい彼と入れ替え可能となり、相手は変わってもそこにある恋人

同士という「関係」—あるいは「役割」は何ら変化しないのである。日本人の人間関係においては相手との「間柄」による水平的自己規定がなされると、土居(1960)や木村(1972)が指摘しているが、L群のパターンはこのことに深くかかわりがありそうに思われる。

次に、人物が2人描かれている図版では、対人関係の表現や葛藤の処理について着目した。まずカード4では、統計的に有意でないものの、H群において攻撃を加えるものとしての第三者の関与する物語が多い傾向がみられた。画面中の男性はそれに対して反撃しようとしており、H群は他者からの攻撃に敏感であり、自尊心を傷つけられると他の面では抑制している攻撃性が前面に出てしまうのではないかと考えられる。これは、対人恐怖症者における強気と弱気の矛盾する二面性として指摘されてきたものに該当すると思われる。一方L群では、戦争、危険な仕事などを理由とし、男性的な役割をとるものが特に男子に多くみられた。逆にH群では役割獲得の不足さが示唆されるが、これは6BMで別の形で表われてくる。L群では女子においても、careするという女性役割のとり入れがみられたが、同一性の確立という面と3BMで述べたような「役割」という面と、両方からとらえていくのが適切であろうと思われる。またL群のパターンは、対人的葛藤とかカードの持つ危機的雰囲気回避している面もあると思われ、3BMでもそうであったが重いテーマに直面しきれない感がある。一方H群では、「その他」にみられたように、葛藤に耐えられなくなると人間関係がテレビの画面のようにかっこに入れられてしまい、ここでも彼らのかかわりは、避けられずにコミットしてくるものか、さもなければ無視せざるをえないような力をもつものであると考えられる。

13MFになると葛藤はカードの中に持ち込まれ、これまでに表わされた両群の傾向がさらに明瞭な形をとってくる。H群では、男性が女性を殺すという直接的な攻撃性の表出が多くみられた。理由は、愛しているから殺す、何か言われてカッとして殺す、利害のために殺す等いろいろであるが、殺意の背後では、自尊心と傷つきやすさ、愛と憎しみのアンビバレンスなどが複雑に錯綜していると考えられる。L群では攻撃性は第三者の手を借りて間接的に表現され、しかも画面のショックが合理的に処理されて、2人の間の生々しいぶつかりあいは見られない。また、これまでのカードも含めて、L群では物語の因果関係や結末が、主人公の行動によって決定されるよりも、全体の流れの中で知らず知らず成りゆき的に形成されていく傾向が強いように思われる。H群では行動と結末は直接的に結びついているが、関係に余裕がなく対人的距離の不適切さがみとめられる。したがって、対人的不安の有無が極端な者はどちらも、ある意味でナルシスティックであり真の対人関係を持ちにくいのではないかと考えられる。

さて、6BMにおいては、他のカードと異なり人物間の直接的なやりとりはL群に多くみられた。このカードでは人物が母一息子とみなされやすく、絵の雰囲気に危機感が少なくむしろ emotional な mood が支配的であるために、対等な男女を描いたカードとは別の面が表現されたものと思われる。L群においては、特に男子で息子が自立していく物語が多く、4でもみられた性同一性の安定が予想されるが、息子もどってきたり母親が支配的な物語も同じくらいあり、この点からは逆に母権的な力の強さが考えられる。筆者はここからさらに、外の世界と母の世界の等質性、行き来の可能性を推測するものであるが、詳しくは全体の考察で触れたい。これとは対照的に、H群、特に男子では結婚のための自立というテーマが全く欠落しており、母からの分離が課題になっていると考えられる。しかし、干渉的な母親像はL群と同じくらいであり、しかも

もどってくる話はほとんどないので、これは単なる未熟性とは言い切れず、より無意識的、元型的な問題が本質にあると思われる。河合(1980)は対人恐怖の本質にある「母親殺しのアグレッション」を指摘しているが、そのすさまじさとそれゆえの抑圧のために、他のカードの人間関係とは逆にここでは対決が避けられていると考えられる。また、H群において父の死のテーマが多くみられたことは、佐々木(1979)がLacanを援用して、日本においては母子の想像的融合を破るものとしての父親の機能が不在であると述べている状況を、象徴的に表現しているように感じられる。

次に、人物の3人描かれた2カードについて、集団との関係という視点から考えてみたい。H群では、主人公が背景に描かれた人物あるいは環境に対して個人的に異和感を持つ者が多く、「場」に入りにくい状況を端的に示している。L群では逆に、親和的な感情を持つ者が多く、環境に溶けこんでいる。Bellak(1954)は、このカードでは「家族からの自立」対「背景に描かれた保守的な生活への追従」というテーマが出やすいとしているが、H群では前者が、L群では後者が前景に出ていると思われる。H群では「帰ってきてもやはり自分のいる場所ではないと思って再び出ていく」パターンが多いのに対して、L群では「出ていった後やっぱり故郷がいいと帰ってくる」パターンが多く、Uターンの向きがまったく逆であるのがきわめて対照的である。このカードには女子の方が同一視しやすいため、両群とも女子においてこの傾向がより顕著であったが、自立のテーマを考えると、これは6BMにおける男子の傾向と対応する面があると考えられる。ここでもH群では、対人関係が表現されない場合は背景が無視されてしまい、1や4と同じパターンを示している。

最後に blank card について、登場人物の特性から若干の考察を加えたい。H群では登場人物1人の物語が多く、彼らの究極的な関心が自己の内面に集中していることを示している。また、H群女子では、女子大学生の特徴として辻井(1980)が指摘した「幸福な家庭の物語」がほとんどみられず、異性を主人公とした物語が散見されることから、既存の性役割には消極的ながら、なお新しい同一性を得ることのできない状況が推測される。筆者(1981)は、同じ被験者にSD法形式の自己像尺度を施行した調査において、現実自己、他者自己、およびそのズレから、H群男子の自己認知を「おびえ」型、女子のそれを「しらげ」型ととらえたが、男子でテスト不安を表現する者がみられたことも考えると、ここでもこのような見方が支持されると思われる。一方L群女子では、恋人、夫婦の幸福な物語に加えて、辻井(1980)が高校生女子の特徴として指摘したメルヘン的な物語が多くなっている。このような反応の特徴、さらに他のカードの結果も総合すると、L群では Marcia(1966)のいう自我同一性達成の早期完了³⁾(foreclosure: 同一性の危機を経験せず親や社会の意見をとり入れてあっさり目標が決まってしまう状態)の状態における安定を示しているものがあるのではないかと推測される。これらの問題については、次の項でもう一度とりあげるので、再び blank card にもどりたい。L群男子は全体に外界志向であるが、反応の短さや時に写実ともいべき現実描写が表われるのは、何も無いところに直面し自己を顧みざるをえない状況におかれたことへの困惑であるかもしれない。「白」の物語はそのひとつの解決策であり、空虚感を背景としたH群の「無」の物語とは本質的な違いがあると思われる。

(3) 全体的考察一ひとつの総合的試論として一

以上まとめてみると、L群、H群ともその特徴の中に、positive, negative の両面を含んでいると思われる。すなわち、L群は、外的適応よく、対人的円満さに価値を認め、周囲への溶け込

みにより安定している一方で、自我同一性の危機の回避が推測される場合もある。したがって、自分が確立されたあとに、集団ともバランスをとりながらいわば「和して同ぜず」生きているタイプ(調和型)と、鱸(1974)のいう「集団的自我への埋没」状態で、自我の輪郭はあいまいであるが集団の中にいる限り不安なく適応しているタイプ(埋没型)とが混在していると考えられる。一方H群では、「自分」になろうと努力し、他者に対して「個人」としてかかわろうと努力しながらも、対人距離が不適切で抜き差しならないコミットかさもなければ引きこもるという対人パターンを生じる。ここでは、自我を確立するプロセス上で集団に対して宙ぶらりんになっているタイプ(境界人型)と、神経症予備軍ともいえる自我拡散状態のタイプ(神経症型)とが混在していると考えられる。

ここで、自我と集団についてさらに考察を進めるためには、文化的背景に規定された集団の特性を考慮に入れる必要がある。中根(1967)が「タテ社会」と名づけ、河合(1976)が「母性社会」と名づけたように、日本の社会にはゲマインシャフトの色彩が強く、母の世界から出てのち入っ ていこうとする社会にも、また以前の母子関係に類似する関係が存在していると考えられる。したがって、厳密な意味での母からの分離を経ずに、葛藤なく社会に平行移動することが可能であり、これは埋没型のメカニズムとしてL群の3BMや6BMの解釈を支持すると考えられる。逆に、母の世界から分離しようともがいている者は、社会に対しても自立性の点で同様の葛藤を強いられ、どちらも解決できないままに身動きできなくなる。これが境界人型のメカニズムであり、これは加入できないがさりとて集団的価値を否定することもできないという膠着状態である。

さて、次にここに性差という要因を加えてみると、これまでの図式は厳密には男性に関するものであると思われる。本来、男性における成人式としてのイニシエーションは集団への加入であり(Eliade, 1958)、自我同一性も性同一性も母とは違う自分として同一方向にある。したがって、それが達成できない場合は全面的な自己否定に陥ってしまう。しかし、女性の場合は、母との同質性を内に持っていることが一種の security となりながら、母とは異質な「自分」をどう統合していくかということが問題になると思われる。かつて成女式は男性の成人式ほど発達しておらず、それは個人的なもので、大人になることは母親になれることであったが(Eliade, 1958)、ここに自我というものを組み込んだ新しいイニシエーションが必要とされるようになったと思われる。Henderson (1967)が「女性としての自分自身の個性の確認」と述べたように、それは男性とは質的に異なる新しい図式である。女性の対人恐怖を女性の社会進出やアムス優位で説明しようとするのは、従来の男性の図式にあてはめようとするものであって、それも一面の真実を語っているものの、それだけでは不十分な理解しかえられないように思う。このような意味では、男性の方が集団に拘束され自己期待像が画一化していると考えられ、それが「おびえ」に反映されていると思われる。そして、女性の方が既存のものからは自由でありながら、なおかつそれに代わるものを見出せない状態が、「しらげ」に反映していると思われる。

しかし、文化も時とともに変化していく面があり、神経症にも時代的変遷があるので、次にそれらを考慮に入れてみる。境界人型、とくに男性にとっての集団の意味について述べたが、価値観が多様化して絶対的なものが失われつつある今日においては、集団的価値もある程度相対化し集団加入の必要性が減少しつつある。対人恐怖が減少しているという声もきかれるが、このような観点から、いわば社会的な phobia としての対人恐怖が減少してきたのであって、自我の問題

が解決されたわけではなく、おそらく現象として他の病理に転換しているのであろうと考えられる。この点、男性も男性集団へのイニシエーションだけではない何か、そして男性集団そのものの変化を迫られており、既製のモデルが通用しないという点では女性と同じような事態に直面している。病理現象としては、このような同一性の混乱が Apathy といわれる状態として現われてきているのではないかと思われる。さらに、これまで述べてきたH群の対人関係のあり方が Borderline のそれに類似していることもあわせて、対人恐怖の内包している自己と他者の問題は、表現型としては Apathy, Borderline などに移行しているのかもしれない。最近これらの病理現象が増加していること、そして前者が男性に、後者が女性に多いことは、この推測に対して何らかの示唆を与えるものと思われる。西田(1964)は、対人恐怖が「羞恥」型から「おびえ」型に変わってきたと報告しているが、先に述べたように女性の方が自由度が大きい状況を考えてと、次にはこれらも「しらけ」型に変わっていくのかもしれない。

さて、それでは Identity の点からL群をふり返ってみるとどうなるであろうか。筆者には、L群の病理は昨今増加しているといわれる中年のうつ病にみられるのではないかと思われるのである。すでに、L群において関係や役割が重要な位置を占めることについては指摘してきた。Kraus(1969)は、うつ病では自我アイデンティティの形成が不十分なために役割アイデンティティが優勢になっている、と述べている。そして木村(1976)は、これを援用して、「役割アイデンティティに基いて生活する人は他者をもそれぞれの役割アイデンティティにおいてしかみない傾向」があり、人格として相向かわない、と述べており、これは上述の推測を裏付けるものと思われる。埋没型のようによく青年期のアイデンティティの危機を回避した者が、次の危機である中年期において役割喪失という状況に出くわした時、やはりそこでアイデンティティの問題が生じてくると考えられる。その最も大きなものとして、男性の場合は定年や勤務交替など集団的自我を支えてきた集団を喪失した時に、そして女性の場合は母親役割を喪失した時に、それは最も顕著であるように思われる。この時、夫婦の間に子をかすがいとしない関係を回復する地盤がないと、母親は子供にしがみつき、そこに介入する「父親」は不在であり、そこではH群のパターンが再生産される。そしてここでも問われるのは、再び「自分であること」であろう。

対人恐怖からはじまって随分遠くまで来てしまったが、特殊は一般を帰納するともいわれる。さしあたり、役割を捨て去った他の何ものでもない「私」を形成することが、今に生きるわれわれの課題であるのかもしれない。真の意味の対人関係も、また、そこから生じてくるのではないだろうか。

ま と め

以上より、自我の確立と他者、集団との関係という点から、対人不安の高い者も低い者もそれぞれ positive な面と negative な面をあわせ持つことが明らかにされた。また、女性については、従来の男性中心のものとは別の考え方が必要であることが示された。さらに、時代的変遷により表現型としての対人恐怖は他の病理現象に推移しつつあるが、その基底にはやはり自我の問題が存在することが考察された。これらの諸点は、今後臨床と結びつけながら、個別的にあるいは総合的にさらに深めていくことが必要であろう。

注

- 1) Ap 項目の具体例は「人とどのようにつきあったらよいかわからない」「他人が自分をどのように思っているか、とても不安になる」などである。
- 2) ただし、結婚を打ち明けていても親の反対の方が強い場合には I-b とされている。
- 3) Marcia (1966) は自我同一性の危機への対処の仕方から、同一性達成、モラトリアム、早期完了、同一性拡散の4つの status を設定した。一連の研究 (1967, 1970) から、不安はモラトリアム群で最も高く早期完了群で最も低いこと、特に女子では後者が適応的な意味をもつことが報告されている。

引用文献

- Bellak, L. 1954 *The TAT & CAT in clinical use*. New York: Grune & Stratton.
- 土居健郎 1960 自分と甘えの精神病理. 精神経誌, 62, 149-162
- 土居健郎 1971 「甘え」の構造 弘文堂
- Eliade, M. 1958 *Birth and Rebirth*. 堀一郎訳 生と再生 東大出版会 1971
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the Life Cycle*. 小此木啓吾訳編 自我同一性 誠信書房 1973
- Henderson, J. 1967 *Threshold of Initiation*. 河合隼雄・浪花博訳 夢と神話の世界 新泉社 1974
- 笠原嘉編 1972 正視恐怖・体臭恐怖 医学書院
- 河合隼雄 1976 母性社会日本の病理 中央公論社
- 河合隼雄 1980 コング派からみた青年期 小此木啓吾編 青年の精神病理2 弘文堂
- 木村敏 1972 人と人との間 弘文堂
- 木村敏 1976 いわゆる「鬱病性自閉」をめぐって 笠原嘉編 躁うつ病の精神病理1 弘文堂
- 木村法子 1981 青年期における対人恐怖的心性について(I)―自己像との関連から― 第23回日教心大会 発表論文集, 546-547
- Kraus, A. 1969 *Melancholiker und Rollenidentität*. in Schulte u. Mende (Hrsg.) *Melancholie in Forschung, Klinik und Behandlung*. Thieme, Stuttgart.
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego identity Status. *J. Pers. & soc. Psychol.* 3, 551-558
- Marcia, J. E. 1967 Ego-identity status: relationship to change in self-esteem, "general maladjustment", and authoritarianism. *J. Pers.* 35, 118-133.
- Marcia, J. E. & Friedman, M. L. 1970 Ego identity status in college woman. *J. Pers.* 38, 249-263
- 中根千枝 1967 タテ社会の人間関係 講談社現代新書
- 西田博文 1968 青年期神経症の時代的変遷―心因と病像に関して― 児精近 9, 225-252
- 小川捷之 1974 いわゆる対人恐怖症者における「悩み」の構造に関する研究 横浜国立大学教育紀要 14, 1-33
- 佐々木孝次 1979 母親・父親・掟 せりか書房
- 鐘幹八郎 1974 自我同一性の危機の様態に関する臨床心理学的考察 広島大学教育学部紀要 23, 329-342
- 辻井景子 1980 TAT にみる男性像―女性像 京都大学教育学部紀要 26, 303-313
- 内沼幸雄 1977 対人恐怖の人間学 弘文堂

(本研究科博士後期課程)